

土佐のわらべ

第405号《第427回（2015. 6. 11）子どもの本の読書会記録》参加者7人・文書参加5人

『シートン動物記』のなかで自分の好きなもの

『シートン動物記』 から好きなものを

『シートン動物記』をみんなで色々読みました。
私は、子供のころに読んでいたのですが、小学校の図書室で読んで、『シートン動物記』のシリーズは、どこの出版社のものか、もう忘れてしまいましたが、シートンが書いたものからすると、一部だったようで、今回、全く知らない話がたくさんあって驚きました。
例えば、オオカミ王ロボの話は読んでいましたが、シートンの書いたオオカミの話は、ほかにもたくさんあるということを今回知りました。それに、今まで、シートンは動物学者という印象が強く、そのせいか、文学者としてのシートンをあまり意識していませんでした。
ですが、あらためて読んでみると、面白い。
百年たった後にも読まれるようなものを書いた、作家だったのだと思いました。
読書会での話合いは、私のように、昔読んでいたという方と、初めて読んだという方がいましたが、楽しく、もり上がりました。
それぞれが、読んだ話の紹介や、自分の身近な動物、好きな動物のことなど、話がつきませんでした。

シートンの言葉で、
「動物たちの生活は、かならず悲しい最期でおわる。
一生をいっしょうけんめいに生き、悲しい最期をむかえるのが動物たちだということを、はっきり知るところから、動物たちへのいたわりと思いやりの心が生まれます。」
というものをみつけました。
本当に、そのとおりだと思います。
私も、いたわりと思いやりの心を忘れないで、毎日を過ごしたいものです。
動物にも、人にも優しくできれば、うれしいのですが…。

(M.O)